

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第 147 回放送の概要 (2019 年 7 月 27 日放送)

パーソナリティ

たろう

(佃 由晃)

なか

(中嶋邦弘)

くらら

(河野真紀)

あきこ

(村上明貴子)



ミキサー

門ちゃん

(門田成延)

かりん

(妹尾優香)

会計

小山俊則

相談役

わだかん

(和田幹司)

1. ゲストコーナー (1) 保護司、一般社団法人京都わかさねっと事務局長 北川美里さん(70 陽会)

高校生活はあまりいい思い出がなかった。自分の中で中 3 の秋に父親が亡くなり、翌春に祖父が亡くなった。父親が脳卒中で亡くなった時、その前日北川さんと大喧嘩をしたことの自責の念があり、また何をやればいいのかわからない時期が高校時代にあり、重なっていたことでしんどい気持ちが続いた。

兵庫高校は夜間の湊川高校があり同じ教室を使う。食堂は 2 か所あり、たまに出会うが交流はなかった。教室の机は同じものを使っており、近くの貸し本屋で借りた本を机の中に置いておくと、本を読んでいる人がいることに気づいた。メモをやりとしたことがあり、どうしているんだろうと思ったことがあった。亡くなった父親が 3 男で、家を早く出て働けと周りから言われていた時だったので、湊川高校の生徒にシンパシーを感じた。しかし交流は席が変わると途絶えた。

高校時代は勉強が殆ど出来なかったが、国語が好きだったので武庫川短期大学で国文学を勉強した。大学 2 回生の時の就職担当部長が兵庫高校時代の浜崎校長先生で、校内に掲示されている電通の求人票をとって先生に就職をお願いした。電通は推薦が必要と言われ、高校でサッカー部のマネージャーをしていた時の部員のお父さんが、ラジオ関西のえらいさんであることを知り推薦をお願いし、兵庫高校の縁で無事電通に就職できた。バブル時代に超大手の電通で働き、給料もそこそあり華々しい世界を経験した。始めは総務であったが博覧会を担当するプロモーションに変わり、非常に忙しく 8 年間に家で夕食が出来たのは 10 回もなかった。

華々しい生活とは全く違うように思える現在の**保護司**について：

今ちょうど社会を明るくする運動の「更生保護週間」であるが、犯罪をした人、非行をした少年の立ち直りを支援することが、結局社会をよくするという活動で、保護司はそのようなしんどい人に寄り添い、社会復帰の支援をする人です。保護司は非常勤の国家公務員で、ほぼ無償で高い志を持った人のボランティアのため、保護司はどんどん減少している。保護司をすることでかえてくるものは沢山あると思っている。してあげるとか見返りを求めるものではなく、その人たちから教えられることが山ほどある仕事と思っている。保護司は誰でもなれるのでやりたいと思われる方は、保護司又は保護観察所に申し出てください。

今は被害者側に目が向き、被害者に対しては温かい気持ちを持てるが、加害者は排除するのが現在の世の中である。加害者はずーと加害者であったわけではなく、犯罪をしたときはしんどくてどうしようもない状況に追い込まれたためある。加害者の周りはずべて敵であっても、一人くらいは加害者のことを思える人がいてもいいのではという気持ちが根本にあり、活動している。

そのような思いで活動しても裏切られることがあるのではについて、問題を起こした人は約束の時間を守る、ありがとうを言うなど日常生活に関する基本的なしつけがされてない人が殆どで、こうあるべきという世間の常識を期待するのは無理がある。そこに難しさはあるが、つきあっていくことで繋がっていくことは出来ると思っている。

保護司になったきっかけは、面接官がとても熱い気持ちを持った人で、断るつもりでいたが感化されて、私はこれまで自分勝手な人生を送ってきたが、これからは人のために過ごしますと言っている自分がいた。問題を起こした人が立ち直るために必要なことは、仕事、住居、相談相手がいることが生きていく3つの条件であるが、前向きな思いが生まれるよう希望がやはり必要と思う。今は普通の人でも希望を持ってない人がいる。問題を起こした人は小さい頃から虐待を受け、ダメだダメだと言われ続けてきているので、自己肯定感はゼロで、自分のいいところを知らない。自分のことを考え、見つめる時間がない。そのような状況から希望を持たせるには、あなたはいいところを持っていると本人を認めてあげることで、マイナスからゼロに立ち直れることになる。そこから希望を持てるように一緒に支えながら自分で気づきが出るよう、引っ張ってあげることが大事である。これは自分一人では難しく、いろんな人との人間関係の中で養われていくものである。

保護司は支援することも必要だが指導の面も大きく、色んな約束事が守られているかを見守ることも仕事である。その子を認めてあげることで、犯罪を犯した時が人生の底からやり直していく。その子の立ち直りを目の当たりにする時に、立ち直りにはいろんな人が関わり、どんどん自分に自信がついていく過程なんだなと思っている。

若い女性が生きずらさを抱えていることについて、6年前に出会った20歳過ぎの女の子が、覚せい剤で捕まり北川さんの担当になった。自分のことを振り返ることが出来る子で、一生懸命仕事を探した。就職が厳しい時期でいくら探しても見つからなかった。養護施設から出てきたので住む家がなかった。助けてくれる親がないのでワンルームの男の子の家に泊まり込んでいた。そこから立ち直りのための仕事を

探したが、なかったので結局水商売に走り再犯してしまった。そこで女子が一人で生活することのハードルの高さを感じた。北川さんは生きずらい少女を支援する活動をしているが、女子は小さい時から性犯罪、暴力の対象になりやすく、家事を手伝わされ、小さい時から女の子だから〇〇しなさい、とかいったジェンダーを抱えて生きてきている。男の子はしんどさをすぐに出せるが、女の子は抱え込むので、それが大きくなって摂食障害、色んな依存症につながっていくので、女の子は大変である。今の社会には女の子を元気にすることを支援する制度はないのが問題と思っている。

小学校時代は6年生くらいになると女の子の方が言いたいことを言い、しっかりしているが、思春期を経て体が変わっていき、思い通りに行かないことに遭遇し、そこで男の子と女の子の逆転が起きている(くらら)。

2. ミュージック：たかとり救援基地復興隊「夢光る町神戸を」

3. ゲストコーナー(2)

京都府更生保護女性連盟の事務局長を今年3月までの4年間担当した。各種団体はどこも同じ悩みを抱えており、少子高齢化、個別化で地域の担い手が減少している。女性連盟も高齢化とメンバーが減少しており、これまでの寄付団体から実際に活動する団体に変えるために手伝ってほしいと言われ就任した。

4年間に若草プロジェクトの活動、「京更女じかん」という冊子を発行するなどしてきたが、今年4月から京都わかさプロジェクトを一般社団法人化することになり、京都府更生保護女性連盟を離れ「一般社団法人化京都わかさねっと」の事務局長に就任した。



若草プロジェクトは、僧侶で作家の瀬戸内寂聴さんと村木厚子さんたちが発起人になり、生きずらさを抱えている少女たちを、支援のネットワークに繋げましょうということで2016年2月に立ち上げたもの。寂庵が京都にあるので一緒に手伝うことになった。京更女の使命が連盟を盛り上げることであったので、少女を支援しないで何を支援するのかと思い、連盟には熱い思いと時間があるパワフルな女性がいるので、そのパワーで少女たちを元気にしてもらおうと活動が始まった。若草プロジェクトは非行、犯罪を犯した人の他、生きずらさを抱えた少女たちも支援の対象である。

仁藤夢乃さんが言うように、家庭にも学校にも居場所のない少女たちが風俗に走るが、そのスカウトマンに勝ちましょうが当初の目的であった。生きずらさを勉強していくうちに、誰もが生きずらさを持っているように思い、その根っこは孤立などがある。京都若草プロジェクトは、生きずらい人皆が繋がることで自分が元気になる活動につながればと考えているので、女性なら誰でも参加できる活動にしようと思っ

ている。対象年齢としては京都市の事業では40歳としているが、自分で人生をやり直そうと思っている人、夢をあきらめない人は若者と思っており、そのような若者を応援する活動をしたい。そうでなければ生活保護に頼ればいい。

具体的な活動は、①**少女の居場所を作る**：SOSを出している少女に繋がっていない孤立している少女をどうにかしてネットワークに繋げるために、色々な場所に居場所を作ること。児童養護施設の少女たちに機会を提供している。②**困難な状況にある少女に寄り添い、自立を支える**：困難のど真ん中にいる少女にべたっと付いて一緒に上がっていき、歩いていこうという寄り添いのサポートをするもの。③**信頼できる大人を増やす**：これは一番大切で、こんな世の中にしたいなと思えるには、信頼できる大人を増やすことが大事。大概の大人は少女がしんどいと言うと、昔はそんなことなかった、チャラチャラした格好をするから男に悪いことをされると言う。そうではなく少女の立場に立って考えられる、そして少女を盛り上げてくれる大人がもっと増えれば、きっと少女だけでなく生きやすい世の中になるはずである。

風俗のスカウトマンに勝つについて、居場所のない少女たちは誰かにすごいね、えらいね、かわいいねと言われたことがなく、一時的にもチャホヤされるとうれしくなっていく。スカウトマンは衣食住のすべてを用意する。子供を抱えたお母さんには託児所まで用意している。北川さんは、それに勝つには**心が洗われるキャバクラをつくる**と言いつけている。支援などきれいごとを言うだけでなく、スカウトマンよりいい状況を提供出来れば風俗に行かなくて済む。それが今はない。風俗がセーフティネットになっているのは悲しいこと。風俗は搾取され、金づるにされ、40歳を超えると切捨てられてしまう。

少女が一人で風俗でないところで生きていけるだけの金を稼ぎ、住むところがあり、自分の人生を歩んでいける生活が出来るとは今は全くない。だから何とかしたいという思いから活動している。少女たちが集まり、当事者が早く活動できるようにしていきたい。

伴走型支援DXPは、NPO法人「DXP」理事長の今井紀明さんが始めたもので、定時制高校生の自己肯定感を引き出してもらう活動に、コンポーザーとして活動している。先般湊川高校2年生に計8時間ほどの授業をしてきた。その場には謎の転校生ということで一緒に授業を受けた。学生の時に湊川高校生徒と交流したことの復活のような気持ちで参加した。生徒とは相手を否定しない、対等であるというのが活動の基本で、ゲームを通して生徒たちと仲良くなる環境を作っていた。次に北川さん自身が過去のつらかったことを話して、共感が生まれるようにしていく。最後は生徒たちの夢や希望を共有していく。生徒の年齢層には北川さんと同じような人もおり、昔の夜間高校生には非行をした人がいたように思うが、今は引きこもっていてこの学校なら来れるという生徒、全日制がしんどくて入学してきた生徒が多かった。今は起立性障害で朝起きられず夜間なら大丈夫という生徒もいる。

夜間高校生は生きずらさを抱えている生徒が多く、昼間働き夜間学校に来る生徒はしんどい思いをしている。北川さんが自分の悩みを話すと、生徒からすごくたくさんのアドバイスが返ってきたことから、若い人と繋がって共感できることが分かり、生徒たちにはもっと自信を持って、負い目ではなくそれをプラスに出来るようになってくれたらいいなと思った。今DXPが湊川高校で就労支援をしていることを聞き、今後色々な人が湊川高校に関わり、人生はやる気があれば何でも実現できることを伝えてほしいと思う。

(注) DXP : <https://www.dreampossibility.com/>

先般、「女子高生サポートセンターcolabo」という活動をしている仁藤夢乃さんと韓国の視察に行ってきた。韓国の若者の現状は日本より就職率は悪く、家制度が厳しいが支援者はパワフル。日本は支援しようとする叩かれるばかりで、そのようなことは韓国にはない。若い活動家がすごく多かった。しんどさを持つ当事者が、それを自分の糧にして、いいほうにとらえながら新しい活動にする仕組みを作っている。これを日本でも取り入れたいと思った。仁藤夢乃さんは29歳で若く、新宿歌舞伎町で移動バスを横付けし、地方からあてもなく上京し、帰るところがなくウロウロしているうちに悪い人に捕まる女の子を、バスに引っ張り込み救う活動をしている。

(注) colabo : <https://colabo-official.net/projects/>

孤立している女の子たちを、保護司としての個人に頼っているだけではだめだなと思い、我々一人一人はどのようにすれば支援に繋がれるかについて：

仁藤さんから、しんどくて疲れ切って朝帰りしている時に、今日は疲れたねと言った声掛けだけで元気になったと言うのをよく聞いた。女の子たちを非難するのではなく、温かい目で見てもらうことが世の中を変え、その子たちのためになる。

北川さんがこのような活動をしている理由は、世の中の常識やこうあるべきといったことをあまり気にしないことが自分の生きずらさで、みんなと合わせて生活すればするほど生きずらくなる。しかし自由に生きると人とぶつかることになり、それはまた生きずらくなり、もう辞めようかと思う。逆に言うと偏見といったものはないので、その子のいいところや生きずらさがよく見える。その子を褒めることも出来るしその子のいいところを探してあげることも人より出来る。だから自分は必要とされていると思う。一人でもたくさんの子を褒めてあげようと活動しているのは、その子のちょっとしたことでもいいところを探してその子としゃべること、北川さんのこのような思い、行動から世の中は変わっていくのではと思っている。

今の社会は北川さんの思いとは逆の方向に進んでいるように思われる。排除と不寛容が蔓延している。声掛け、おせっかいのおばちゃんが丁度いいように思う。実現したい未来について考えると、居場所が出来ていると、家以外にあそこに行けば北川さんに会えるようなことが積み重なっていくことができれば、その子にとって安心感に繋がる。よく言われるのは悪い子がいた場合、1対1では影響されるが色んな環境を一杯作ることで悪い友達の影響をどんどん薄めることが出来る。いろんなタイプの人との関係を作れば作るほどその人が救われる可能性は高くなる。だから色んな人が繋がる社会は生きずらさがない世界になる。多様性を認め合う社会が望ましいが今は逆方向を向いている。そのままのあなたでいいという関係性が大事である。一人一人がそのような心掛けでいることと、更に保護司さんがいることが大事ということになる。

わかくさねっとはメンバーと寄付を募集しています。

4. 地域瓦版

新長田駅前鉄人28号モニュメントは令和元年10月に10周年を迎えます。

- 鉄人ピアガーデンが7月26日～8月4日の10日間、毎日17時～21時30分に開催。雨天は中止。
- 兵庫駅前広場でのイベントについて、3年目を迎える兵庫駅南公園こどもフェスタ実行委員会が、今年初めて8月11日（日）17時～21時、子どもフェスタ夜市を開催。その日は兵庫図書館がお化け屋敷に変身。今中学生が道具を作ったりレイアウトを考えたりしています。屋台、ゲームコーナー、駄菓子屋さんなど夜市が駅前に出現します。子供たちが主役でプロデュースします。国際色豊かな地域のみんなで兵庫駅前を賑やかに変身させます。
- 恒例の兵庫駅南公園夏のこどもフェスタが8月25日（日）15時～20時開催。思いっきり水遊びをしよう。滑車ロープ、レンタルラジコン、ミニゲームコーナー、すべり台スライダーなど楽しい遊びコーナーが盛りだくさん。夜は19時～20時、手持ち花火大会です。



5. エンディング

地域瓦版で紹介のこどもフェスタは、3人子育て中のくららさんが、あまりにも地域に顔見知りがおらず、困った時に頼れる大人がいないということに気づいた。震災も経験しその時はドアも開かず助けてくれたのが隣接のお兄ちゃん、助けがないと家から出られなかったのも、普段から地域の人と声をかけあえる顔見知りの大人、子供たちにとって頼れる大人を一杯作ってやりたいと思い取り組んでいるところがある。本日のお話をお聞きすると、大事にしていることは間違っていないかと後押しをもらった。

放送音声は、FMYYのHPおよび「ゆうかりに乾杯」のHPで視聴いただけます。

<https://tcc117.jp/fmyy/?cat=51>

<http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/>